

# 啓蒙からポストモダンへ

「世界を読む」ための50+α冊

大橋完太郎 [選]

Des Lumières  
au postmodernisme

「世界を読む」などと大それた看板を掲げてみたものの、これは選者の専門とするフランス思想を中心としたこまごまとしたリストでしかない。とはいえ百科全書派のいた啓蒙期から19世紀へといたる時期に、今日のわたしたちの世界と世界観を形作っている基本的構図が形成されてきたのも間違いではないし、カント以降の近代主義的人間観が成立する以前にマルチな世界像を現実化しようとしていたディドロやルソーの営為のなかに、先んじてなされた近代批判を見ることもそれほど見当違いでもない。今回のリストでは、現代にも通底する問題を取り上げた啓蒙期の著作やそれに関する諸々の研究を取り上げて、現代世界を批判的に理解できるような書物を選んでみた。現代思想の急所に18世紀の問題が場を占めていることが、これらのリストを通じておぼろげにでも分かっていただけばありがたい。それに加えて——ディドロ自身も『百科全書』の編纂を通じてめざしていたことだが——複雑な世界の仕組みを可視化し、リーダブルなものにする世界図絵の書物も選定されている。世界を読むこととは、表象された世界、すなわち「絵画」や「文学」を読む行為でもある。そこから出発し

て、どのようにして「読みかつ生きること」が可能かを考えてみたくなった。

---

1. 『ディドロ著作集 1 哲学Ⅰ』

2. 『ディドロ著作集 2 哲学Ⅱ』

3. 『ディドロ著作集 3 政治・経済』

野沢協・小場瀬卓三ほか訳、法政大学出版局、1976/80/89年 [1 品切、2・3 在庫僅少]

---

4. ドニ・ディドロ

『ラモーの甥』

本田喜代治・平岡昇訳、岩波文庫、1964年

---

5. ドニ・ディドロ

『絵画について』

佐々木健一訳、岩波文庫、2005年

---

6. ドニ・ディドロ

『運命論者ジャックとその主人』

王寺賢太・田口卓臣訳、白水社、2006年

---

7. ダランベール、ディドロ

『百科全書 序論および代表項目』

桑原武夫訳編、岩波文庫、1971年

---

8. ジャン=ジャック・ルソー

『ルソー・コレクション 起源』

川出良枝選／原好男ほか訳、白水社、2012年

---

9. ジャン＝ジャック・ルソー

『ルソー・コレクション 文明』

川出良枝選／山路昭ほか訳，白水社，2012年

---

10. ヴォルテール

『カンディード 他五篇』

植田祐次訳，岩波文庫，2005年

来年2013年はデイドロ生誕300年，今年2012年はルソー生誕300年にあたる。現在フランスを中心に世界各地で読み直しが進められている二人の著作のなかでも，比較的入手が簡単なものとして上記のものをあげておく。多様性と可塑性に満ちたデイドロの思考と，強い情念と強靱な批判精神に貫かれたルソーの思考は好対照をなし，現在を考える際にも有効な視点を見いだすことができる。（岩波文庫版『ラモーの甥』は絶版にすべきではないし，デイドロ晩年の主著である『ブーガンヴィル号航海記補遺』『ダランベールの夢』などが収められた『デイドロ著作集』についても続刊の刊行が強く望まれる。）ほかには，当時最大の知識人と見なされていたヴォルテールの傑作『カンディード』も必読。大災害と人間の運命について考えることが，それぞれの思想家にとって切迫した課題であったことが分かる。

---

11. エティエンヌ・ボノ・ド・コンディヤック

『動物論——デカルトとビュフォン氏の見解に関する批判的考察を踏まえた，動物の基本的諸能力を解明する試み』

古茂田宏訳，法政大学出版局，2011年

---

12. ジャック・ロジェ

『大博物学者ビュフォン——18世紀フランスの変貌する自然観と社会・文化誌』

ベカエール直美訳，工作舎，1992年

---

13. ホルスト・ブレーデカンフ

『ダーウィンの珊瑚

——進化論のダイアグラムと博物学』

濱中春訳，法政大学出版局，2010年

「動物化」という語がポストモダン的な思考の代名詞となって久しいが，背後には西洋における膨大な動物論の集積がある。西洋における各種の動物論をまとめたエリザベート・ド・フォントネイ『動物たちの沈黙』（彩流社，2008年）やアガンベン『開かれ』（平凡社，2004年）あるいは，政治哲学と動物論の関係をめぐるデリダ『獣と主権者』（*La bête et le souverain*, Galilée, 2002-03）など，現代思想の動物論的展開ともいうべき言論状況に沿って，18世紀フランスの動物論の見直しも進んでいる。18世紀の哲学者コンディヤックの『動物論』の翻訳刊行は，近年の日本におけるコンディヤック研究の進展とも相まって喜ばしい出来事だ。デカルトとビュフォンの動物論のあいだの経緯がこれによって明らかになる。ジャック・ロジェの書籍は博物誌家ビュフォンに関する数少ない日本語文献だが，ブレ・ダーウィニズムの生物論を代表する18世紀の博物学者の姿を余すところなく伝えてくれる。生命哲学やその歴史についての研究は進んでいるが，ロジェの業績は今日のフランスにおいてもまだ乗り越えられていない。そうした問題を受け継ぎつつ，文化史方面で豊かな成果をあげているのがドイツの美術史家ブレーデカンフ。ダーウィンの進化論の形成にイメージ的思考が寄与した役割を考えることで，想像力や表象文化の地平を問い直す本作は，イメージ論と生物哲学が結びついたブレ・ダーウィニズムの世界と系統的思考のなかで確立された進化論の世界を基礎付けながらつないで

いく。

---

14. ツヴェタン・トドロフ

『未完の菜園』

——フランスにおける人間主義の思想』

内藤雅文訳，法政大学出版局，2002年

---

15. ウンベルト・エーコ

『カントとカモノハシ』(上・下)

柱本元彦ほか訳，岩波書店，2003年

---

16. ジャン・スタロバンスキー

『病のうちなる治療業』

——啓蒙時代の人為に対する批判と正当化』

小池健男ほか訳，法政大学出版局，1994年

---

17. フィリップ・ラクー＝ラバルト

『近代人の模倣』

大西雅一郎訳，みすず書房，2003年

---

思想史のなかでの18世紀の重要性を示す研究書の翻訳を数点。トドロフは近年思想史的な業績を多数残しているが，本書は「人間主義」を中心概念に分かりやすくまとめられた18世紀のテーマ別思想史の教科書的存在。エーコの『カントとカモノハシ』は，カント的な枠組みによって科学的分類と現実との懸隔を考えることの困難さを多角的に検討したもの。総花的かつ物語的な展開も含めて，エーコの，百科全書的な読み物としても楽しめる。精神分析批評の名で知られていたスタロバンスキーは，むしろ豊かな文才と洞察とに基づいた文明批評家と呼ばれるに相応しい。思考はリーダーダブルな文体で表わされ，一切の剰余も虚飾もなく，だが実に豊かな手応えを伴って進んでいく。本書冒頭に所収の文明論は，「文化とは何か」「文明とは何か」を考える際に一度は読まれるべきであろう。ラクー＝ラバルト『近代人の模倣』は難解な本で

はあるが，第一章で取り上げられたディドロ論については，ディドロの基本概念を押さえつつ，「模倣」という観点から見た概念史の重要性に見事にスポットが当てられている。

---

18. 寺田元一

『編集知の世紀——一八世紀フランスにおける「市民的公共圏」と『百科全書』』

日本評論社，2003年

---

19. 鷺見洋一

『『百科全書』と世界図絵』

岩波書店，2009年

---

20. 隠岐さや香

『科学アカデミーと有用な科学——フォントネルの夢からコンドルセのユートピアへ』

名古屋大学出版会，2011年

---

21. 水林章

『カンディード——〈戦争〉を前にした青年』

みすず書房，2005年

---

22. 石原あえか

『科学する詩人ゲーテ』

慶應義塾大学出版会，2010年

---

これらは日本の18世紀研究者による著作。いずれもフランスはじめ他国の研究と比べて遜色がないばかりか，それを凌駕してさえいる。世界的研究水準との関係でいえば，『啓蒙の地下文書』（既刊2巻，法政大学出版局，2008年～）の翻訳なども，その意味ではきわめて重要な成果である。上にあげた書籍は，いずれも，啓蒙思想と公共権の関係（寺田），啓蒙時代の世界表象（鷺見），科学政策と言説（隠岐），戦争の時代における生と文学（水林），科学と詩（石原）など，確たる専門的な知のもとで現代的な課題が扱われているという点で

も共通の側面をもっており、現状に対する啓発の度合いもきわめて高い。

---

23. ミシェル・フーコー

『狂気の歴史』

田村椒訳, 新潮社, 1975年

---

24. ミシェル・フーコー

『言葉と物』

渡辺一民・佐々木明訳, 新潮社, 1974年

---

25. ミシェル・フーコー

「汚辱に塗れた人々の生」『フーコー・コレクション6 生政治・統治』

丹生谷貴志訳, ちくま学芸文庫, 2006年

17～18世紀研究と現代思想のつなぎ目役として、ミシェル・フーコー以上の存在はいない。初期の『狂気の歴史』においても、デイドロの『ラモーの甥』の位置づけは謎に満ちたものであった。フーコーは文学におけるもっとも知的な実践者としてデイドロとブルトンの名を挙げているが、そうした知的複雑さもあってか、『狂気の歴史』『言葉と物』においても、デイドロに関する評価をはっきりと表明することはない。フーコーの知のなかでデイドロが一つの「謎」であったと言うべきだろうか。それは言い換えれば、フーコー読解の可能性としてのデイドロ読解があるということでもある。もちろん、ここでフーコーとデイドロを取り上げるのは、狭い意味でのフランス思想の影響関係を考えたいからではない。『ラモーの甥』や「汚辱に塗れた人々の生」内で表わされていた名もなきものたちの生の様態を考えることは、貧富の格差を無制限に産み出す現代社会の状況を考えることに直結するからだ。「歴史の外」に住む偉大でもなければ有名でもないわたしたちが、いかに生きるべきかを問わねばならない

(そうして、そういうことを書きながらも、書くことによって市井の無名性から逃れようとするこの私の、業の深い欲望のようなものは何であろうかということも考えねばならない)。

---

26. ミシェル・セール

『パラジット——寄食者の論理』

及川馥・米山親能訳, 法政大学出版局, 1987年

---

27. バーバラ・スタフォード

『ヴィジュアル・アナロジー

——つなぐ技術としての人間意識』

高山宏訳, 産業図書, 2006年

現代と18世紀の橋渡し役として、ミシェル・セールの名もあげておこう。ライプニッツを中心とした科学史・科学哲学の大家セールだが、日本ではまだその仕事の全容が知られているとはいえない。数理哲学者でありながらも小説的な散文の名手としても知られる彼の初期作品『パラジット』はフランスで1980年に刊行されている。「para-」という接頭辞の多義性に注目しながらフランス近代の「寄食的思考」を発生させた権力と資本の論理を浮き彫りにする卓越した試みの書だ。セールは、ポストモダン理論の可能性を考える際にもっとも再評価されてしかるべき人物の一人であろう。スタフォードなどと併せてライプニッツの世界像をイメージしつつ読むのがひとつの現代的な試みかもしれない(その場合は、『パラジット』ではなく、『五感——混合体の哲学』(法政大学出版局, 1991年)などと併せて読むのが有効に思われる)。

---

28. ジャン＝フランソワ・リオータル

『非人間的なもの』

篠原資明ほか訳, 法政大学出版局, 2002年

さらにもう一人、現代思想と18世紀の思考をつなぐ人物として、ジャン＝フランソワ・リオタールも忘れてはならない。本書『非人間的なもの』は、デイドロ的な関係性による主体概念を通じてカントの主体概念を批判する、フォーコーやドゥルーズの試みとも通じた哲学的企ての書である。リオタール哲学の総体については、原書の刊行から40年後にして昨年ようやく刊行された名著『言説、形象』（法政大学出版局）の翻訳とともに日本でも再検証が始まるだろう。彼特有の美学的関心が非人間性へと展開する屈曲点に位置するのが「形象」概念ではないかと推測している。

---

29. ロバート・ダーントン

『猫の大虐殺』

海保真夫・鷺見洋一訳、岩波現代文庫、2007年

---

30. G. ヴィガレロ編、A. コルバンほか

『身体の歴史 1 16-18世紀』

鷺見洋一監訳、藤原書店、2010年

---

31. リン・ハント

『人権を創造する』

松浦義弘訳、岩波書店、2011年

---

32. カルロ・ギンズブルク

『ピノッキオの眼』

竹山博英訳、せりか書房、2001年

西洋史の分野からもあげておこう。いずれも17～18世紀のフランスを中心に扱ったもので、関連研究者にとっても一般読者にとっても基礎文献となるものだ。ダーントンによる『猫の大虐殺』は、文化史研究のお手本のような論集。猫を殺すことにまつわる歴史的な意味の変遷をとらえつつ、台頭しつつあるブルジョワ社会における欲求不満の構造をとらえる表題作は秀逸。ペ

ット殺しが流行る現代の世相にも通じる。コルバン『身体の歴史』はアナールの身体論の待望の翻訳。三巻からなる大作を日本語にした翻訳チームには頭が下がる。アメリカのフランス史研究の重鎮リン・ハントの『人権を創造する』は、単なる法権利の実証研究を超えて、人権概念が人々の心でどのように作用していたのかを問う、いわば「心性史」としての人権の歴史として書かれている。近代以降の人間の権利と差別の構造を考える万人に読まれるべき書物だ。『チーズとうじ虫』（みすず書房、2012年）で知られるイタリアの歴史家ギンズブルクによる『ピノッキオの眼』は、ジャンル横断的におこなわれる表象文化論や文化史的研究の完成系を示している。歴史研究によっては埋めきれない余白を語る描写・芸術の必然性を説いた冒頭の論考「異化」や、デイドロを題材に人間道徳の形を根底から問い直した「中国人官吏を殺すこと」など、決して色あせることのない論考が並ぶ。

---

33. E. H. ゴンブリッチ

『美術の物語（ポケット版）』

天野衛ほか訳、ファイドン、2011年

---

34. ユルギス・バルトルシャイティス

『アペラシオン』

——形態の伝説をめぐる4つのエッセー』

種村季弘・巖谷國士訳、国書刊行会、1991年

---

35. ヴィクトル・ストイキツァ

『絵画をいかに味わうか』

岡田温司監訳、平凡社、2010年

---

36. ジョルジョ・アガンベン

『スタンツェ』

——西洋文化における言葉とイメージ』

岡田温司訳、ちくま学芸文庫、2008年

---

37. 岡田温司

『ヴィーナスの誕生——視覚文化への招待』

みすず書房, 2006年

---

38. 田中純

『イメージの自然史』

羽鳥書店, 2010年

表象文化論的な思考のなかでも、とりわけ視覚文化や美術史に関わる必読書を紹介しておこう。ゴンブリッチ『美術の物語』はポケット版翻訳が出たのが僥倖。一家に一冊、いや、少しでも美術に興味のある人ならば一人一冊。美術史のエッセンスをポケットに収めて、次の場所へ飛び立とう。リトアニア生まれのバルトルシャイティスとルーマニア生まれのストイキツァが並んだのは偶然なのだが、シャステルでもなくマールでもないこの二人が表象文化論らしいということに、この分野におけるヨーロッパの学問的地政学が見えるような気もする。とまれ、前者は光学的思考と視角表象を論じたものとして興味深いし、後者は現在非常に精力的に発表を続けているストイキツァの思考の濃密さと幅広さ、機知の鋭さが堪能できる論集となっている。後者所収のストイキツァ自らが語った「知的自伝」は、ともすれば忘れそうになる「学問ができる自由と喜び」を伝えてくれる希少な証言でもある。アガンベンの『スタンツェ』は、イメージと空間性をめぐる豊か過ぎる思索。最後に日本におけるイメージ論的な表象文化論の第一人者として、岡田温司氏と田中純氏。岡田氏は、精力的などという生易しい言葉では形容できないほどの出版点数を誇る書き手であり、彼の本を愛する者からは「月刊岡田」とさえ呼ばれている。評者が個人的に推すのは《理想の教

科書》シリーズの一冊として彼が書いた本書『ヴィーナスの誕生』。きわめて平明な口調で現在までの研究史の蓄積とその問題点がしっかりと押さえられた名著で、初学者から大学院レベルまで学ぶことができる。もう一冊は、『アビ・ヴァールブルク 記憶の迷宮』（青土社, 2001年）を皮切りに、『都市の詩学』（東京大学出版会, 2007年）、『政治の美学』（東京大学出版会, 2008年）など、各界の評価が高い重厚な著作を発表し続けている田中純氏が2010年に発表した『イメージの自然史』。読みやすい形式ながら、個別の思考の鋭さや強度にはほぼ毎頁ごとにうならされる。いずれも表象文化論への入り口に相応しい一冊だ。

---

39. G. ドゥルーズ & F. ガタリ

『千のプラトー』（上・中・下）

宇野邦一ほか訳, 河出文庫, 2010年

---

40. ダナ・ハラウェイ

『猿と女とサイボーグ——自然の再発明』

高橋さきの訳, 青土社, 2000年

---

41. 松浦寿輝

『官能の哲学』

ちくま学芸文庫, 2009年

---

42. 中島隆博

『莊子——鶏となって時を告げよ』

岩波書店, 2009年

---

43. 小泉義之

『兵士デカルト——戦いから祈りへ』

勁草書房, 1995年

デイドロから始まりフーコー、リオタールを経てドゥルーズ&ガタリへと継承された問題は、「いかに人間を解体させるか」というものであった。『千のプラトー』にある生成変化論をこうした系譜のなかで読

み解くことによって、新しい人間像を描いていくことが今日の人文学の務めのひとつであろう。ハラウェイ『猿と女とサイボーグ』はその意味できわめて先駆的な著作だといえる。松浦寿輝『官能の哲学』および中島隆博『荘子』は、それぞれ、古い意味での人間中心主義を回避するための強靱な思考が詰まった書。『兵士デカルト』は、合理的であることが戦いであり祈りでもあることを説いた名著。これらの書物は、思考を通じた変革がいかに可能かを具体的に教えてくれる。

---

44. F. フェルナンデス＝アルメスト

『人間の境界はどこにあるのだろうか？』

長谷川眞理子訳、岩波書店、2008年

---

45. マイク・ハンセル

『建築する動物たち』

長野敬・赤松眞紀訳、青土社、2009年

---

46. 松沢哲郎

『想像するちから』

—— チンパンジーが教えてくれた人間の心』

岩波書店、2011年

---

47. 仲谷正史・笈康明・白土寛和

『触感をつくる』

—— 《テクニカル》という考え方』

岩波書店、2011年

---

さて、人間であることをやめた人間はどこへ行くのだろうか。近年飛躍的に発展した環境学や動物生態学、霊長類学（サル学）からの成果は、人間のもつ根源的な非人間性について教えてくれる。アルメストの書物は、動物的と言われてきた諸能力を発展させることによってしか人間は人間になれないと説くだろう。動物が織りなす数々の高度な建築物を分析するハンセルは、人間

の育んできた工学や美学に根底的な批判を投げかける。日本のサル学の大家である松沢の書は、進化の隣人に寄り添いながら生きることの重要性を述べるにとどまらない。そこでは彼らへの尊敬と慈愛が、この上なく優しい文体として結晶化している。『触感をつくる』は、触覚という確実だが曖昧な感覚を再考するための非常に野心的な試みで、若手研究者のコラボレーションとしても手本になる一冊だ。触覚を考えると、それは人間的一个の大きな課題でもあるが、それは人間的なものを非人間化する行為でもあるし、逆に非人間的なものを人間化する行為でもある。人類学・動物学的な成果と人間工学的な触覚論との出会いをいつか実現させてみたい。

---

48. 花田清輝

『復興期の精神』

講談社文芸文庫、2008年

---

49. 小野正嗣

『文学（ヒューマニティーズ）』

岩波書店、2012年

---

50. ジャン＝ポール・サルトル

『嘔吐』

鈴木道彦訳、人文書院、2010年

---

51. トマス・ピンチョン

『競売ナンバー49の叫び』

佐藤良明訳、新潮社、2011年

---

52. スティーブ・エリクソン

『Xのアーチ』

柴田元幸訳、集英社、1996年

---

53. 小栗虫太郎

『黒死館殺人事件』

河出文庫、2008年

---

---

#### 54. 高野文子

##### 『黄色い本』

講談社, 2002年

---

#### 55. 管啓次郎

##### 『本は読めないものだから心配するな』

左右社, 2011年(新装版)

論考や批評, 詩や小説といったものが可能になるのも, わたしたちは何かを読む存在であり, わたしたちが分かっていたいなかった何かを読むに値するものへと変換できる, という信仰にも似た素朴な思いがあるからに違いない。世界とわたしたちはつながる, 読むことを通じて。

『復興期の精神』では, 戦後まもない日本の光景がルネサンス・イタリアを出発点とする西欧知識人の世界と重ねあわされている。花田が何を「復興」させたかったのかという問題は, 現在別種の「復興」を強いられているわたしたちに直接オーバーラップしてくる。そう, 文学とは, 読むことを通じて他者の経験を取り入れる良心的な方法なのだ——しかも他者そのものを決して我有化することがないように仕方——小野正嗣は豊かなレフェランスを通じてそのことを繰り返し教えてくれる。

『嘔吐』『競売ナンバー49』『Xのアーチ』は, 近代が現代人に与えている問題やプレッシャーを明らかにしてくれるという意味で, 今でも十分に「オーバーラップ」させて読むことが可能な書物の代表的な存在だ。論文が書けない18世紀研究者のロカントランがまわりの存在に一切耐えきれなくなるあの瞬間に, あるいは合衆国開闢以来存在していた闇の郵便組織の存在にただ一人勤付いたときに, あるいはフランス革命と黒人奴隷制の混血の娘の姿が20世紀末

のベルリンの情景と交錯しながら反響していくときに, わたしたちは「歴史」の存在とその力に慄然とするほかはない。結局, いや, おそらく, 最後まで, 何も清算されたことはなく, これからもされることはないのだろう。ならば, いかに読み, いかに生きるべきか。

読書と青春が幸福な結婚をなしていた時を振り返りつつ『黄色い本』をめぐることで, 読者は読書が生活者にとっての優しい慰めであり, 読書家であったはずのインテリが役立たずとして消えていったあの時代を思い起こさずにはいられない。高校を卒業した主人公がすぐに服飾工場で働き始めることになるような, あの時代のことだ。「黄色い本」はあれきり返却されたままだった。時は流れた。今や働き口など簡単にみつからない。輝かしい未来も成長も発展も今ひとつ信じることができない。もう一度, 返したはずの本を手にとってみようか。ジャック・チボーも言っていたのではないか, 「いつでも来てくれたまえ, メーゾン・ラフィットへ」と。何一つ分からなくても心配しなくていい。「本は読めない」ものなのだから。今こそ, 読め。良き本と出会い, 世界に気づき, 世界を知る。そこから何かが変わる。読めない本はいつもあなたに命じているのだ, 「踏破せよ, アトラスを」と。

---

#### 大橋完太郎 (Ohashi Kantaro)

1973年生。東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻博士課程単位取得退学。博士(学術)。東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター(UTCP)」特任講師をへて, 神戸女学院大学文学部総合文化学科専任講師。思想史・表象文化論。著書に『ディドロの唯物論——群れと変容の哲学』(法政大学出版局)『ディスポジション——配置としての世界』(共著, 現代企画室), 共訳書にストイキッツァ『絵画をいかに味わうか』(平凡社), レステル『文化の動物的起源』(近刊, 勁草書房)ほか。